

現代の女子学生における潜在的キャリア意識の研究

—ジェンダー・アイデンティティ、キャリア成熟および結婚願望との関連—

Female student's career development : Gender identity, Career Maturity and hope to marriage

宮崎 圭子

文学部臨床心理学科

Keiko Miyazaki

Faculty of Literature Department of
clinical Psychology

篠崎 恵

人文科学研究科

Kei Shinozaki

Graduate School of Humanities Division of
Clinical Psychology

要 約

本研究の目的は、現代の女子学生が結婚・育児を通して「働く」ということへのイメージとジェンダー・アイデンティティ、キャリア成熟度および結婚願望との関連を明らかにすることであった。関東圏内の女子学部生50名および大学院生（女子）13名を対象に調査を行った。2種類の刺激文を提示し、物語を作成してもらった。また、ジェンダー・アイデンティティ尺度15項目（佐々木・尾崎，2007）、成人キャリア成熟尺度27項目（坂柳，1999）および将来家庭を持ちたいと思うかの1項目（2件法）の質問に回答してもらった。作成された物語を3群（仕事と家庭の両立群、仕事を辞めて家庭を選択した群、葛藤群）に分類した。上記2つの尺度を従属変数、家庭を持ちたいかを独立変数とした2要因分散分析を行った。その結果、将来家庭を持ちたいと回答した人の方が1%水準で「展望的性同一性」の得点が高く、5%水準で「自己一貫性同一性」の得点が高いという結果になった。また、判別分析も行った。その結果、展望的性同一性と自己一致的性同一性、人生キャリア自律性の得点が高い傾向にある学生ほど家庭を持ちたいと思っている傾向にあり、他者一致的性同一性と人生キャリア計画性の得点が高い傾向にある学生ほど家庭をもたないと思っている傾向が見られた。

【問題】

「日本で最も生かしきれていない人材は女性」——安倍晋三首相は2013年4月、自身の経済政策「アベノミクス」の成長戦略として、女性の活躍を推進する方針を打ち出した（東京CNN，2013）。これは、女性を持つ力を最大限に発揮できる環境を整えることや、仕事か家庭のどちらかを選ぶのではなく、両立が可能ないように支援をして

いくことを目的としている。

我が国においては、女性の労働力人口比率が20～30歳代を中心に低下する、いわゆるM字カーブ問題が指摘されてきた（総務省，2014）。これは、年齢別にみると20～30歳代の女性の労働力人口比率が窪みM字を描くことからこのように言われている。このM字の傾向は近年数字上では改善している状況にある。しかし、カーブの窪みが

ゆるくなったのは、女性が仕事を続けながら出産・育児がしやすくなったのではなく、単に晩婚・晩産化が進んだだけという指摘もある（高橋，2008）。

さらに、岩田・大沢（2015）は、仕事は続けたいが今の会社で子育てと両立できるかどうか分からない、自分のキャリアがこの先どのように開けていくのか、その様子が想像できない、あるいは今のような働き方では心身を崩してしまうなど、先が見えないことから退職を考える女性が少なくないと述べている。

先述した東京CNN（2013）では、「欧米人ジャーナリストにとっては、女性の労働参加を促進するのに経済効果という議論を持ち出す必要があること自体が驚きだ。」というコメントまである。

ウーマノミクスという造語の生みの親松井（2014）によれば、日本の人口が2060年までに30%減少し、高齢者の割合が40%へ拡大する。男女の雇用格差解消により日本のGDPは13%近く増加する可能性があるとして松井は試算している。女性の就業を促進するメリットは大きいのである。

女性のライフイベントごとの就業形態の変化を見てみよう（総務省，2014）。結婚後に27.7%、第1子出産で更に36.0%が離職しており、結婚と出産を契機に6割強の女性が退職を選んでいる。このことから結婚と出産は、女性にとって就業継続ができない要因として大きな影響を与えることを示している（Figure 1）。その一方で、約9割の女性が、何らかの形の就業を希望していることも事実なのである（内閣府男女共同参画局，2007）。この問題に対して女性が直面する課題を克服し、女性の活躍

を経済の活性化につなげるためには、女性のライフステージごとの課題に対応した施策を展開することが必要である（内閣府男女共同参画白書，2013）。

一方で、女性の成功恐怖研究（Horner，1972）を受けて、新井・宮崎（2012）は以下のような研究結果を報告している。関東圏内X女子大学生55名に「昇進（転勤）」・「恋人の存在」という条件を含めた刺激文から続けて物語を作成してもらった。その物語の結果を χ^2 検定、残差分析を行った。その結果、全ての条件にわたって転勤を選択した群が過半数を占めることが明らかとなった。つまりは、現代の女子大生は、成功回避をしていないということである。

さらに、篠崎・宮崎（2015）は結婚・育児及び「働き続けること」について、女子学生がどのようなイメージを持っているかについて研究報告している。関東圏内Y大学生および大学院生計63名に2種類（子ども有り、子どもなし）の刺激文に続いてその物語を作成してもらった。収集された63人分の物語を結末別に分類し、 χ^2 検定を行った。子どもなし群では、「仕事と家事を両立」と「葛藤」の結末を書いた女子学生が多く、「好きなことをした」が非常に少ないということが明らかとなった（Figure 2）。子ども有り群では、「仕事と家事を両立」の結末を書いた女子学生が多いということが明らかとなった（Figure 3）。以上のことから、現代の女子学生は深層意識において、仕事を辞めるというイメージはなく、仕事を続けることを前提に今後どうしていくかを考えていると考察した。

女性は、大学時代に「仕事を辞める」と

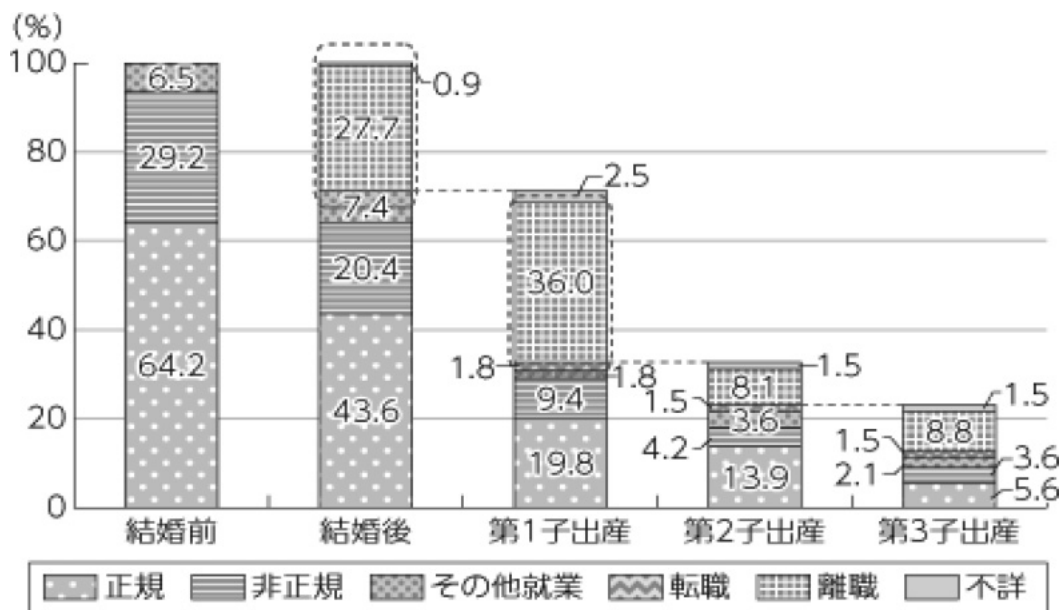


Figure 1 ライフイベントによる女性の就業形態の変化（内閣府男女共同参画局「男女共同参画白書」、2013）

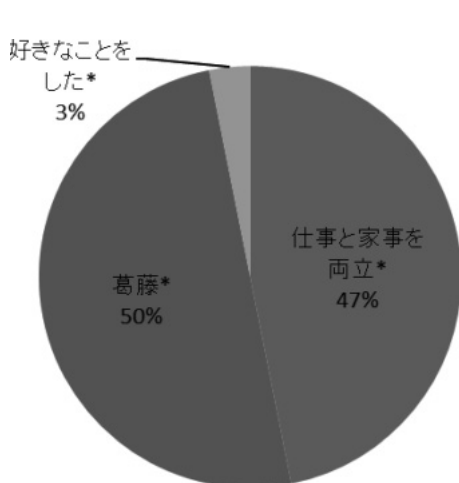


Figure 2 子ども無し群における「物語結末」

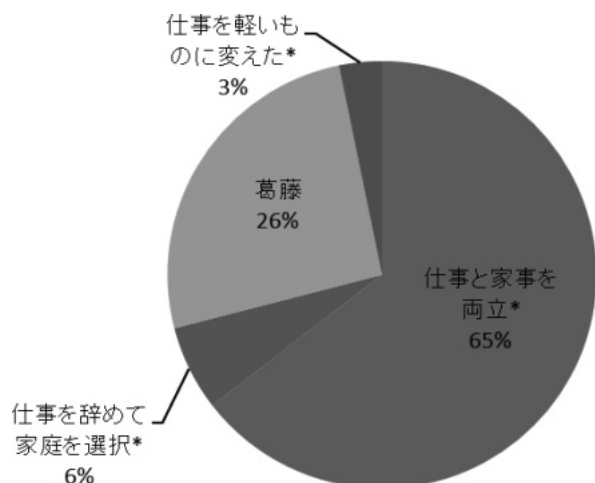


Figure 3 子ども有り群における「物語結末」

いうイメージがない。にもかかわらず、現実では先述したように、M字カーブが起きている。理想（イメージ）はあったものの、現実の厳しさに修正を余儀なくされるのだろう。

M字カーブ（現実）を説明するものとして、女子大生の意識をもう少し詳細に別の視点で分析してみる必要が出てくる。ちな

みに、先述の篠崎・宮崎（2015）の研究では、「家庭を捨てた」という結末物語を書いたものは0人であった。ということは、結婚（家庭を持つ）願望に影響を与えている要因を探ることも一考である。例えば、ジェンダー意識という視点は興味深い。また、彼女たちのキャリアの成熟度からの影響も検討する必要が出てくる。

【目的】

以上より、本研究の目的は女子大生のジェンダーおよびキャリア成熟度が潜在的キャリア意識（イメージ）によって差があるのかを明らかにすることである。また、彼女たちの結婚願望による差および影響も検討する。

本研究は跡見学園女子大学文学部臨床心理学科倫理委員会において承認を得られている（承認番号15007）。

【方法】

調査時期：2015年5月中旬～2015年7月下旬

調査対象：関東圏内の私立A女子大学の学部生50名及び同女子大学院生13名（学部生：M20.07歳，SD0.71

歳、大学院生：M22.38歳，SD0.51歳）。

調査方法：学部生には、授業時間後に一斉配布一斉回収。大学院生には、アンケート用紙を封筒に入れて個別に配布。なお、2種類の刺激文は無作為に配布されている。

調査内容：

① ジェンダー・アイデンティティ尺度

佐々木・尾崎（2007）により作成された尺度である。自己の性別が一貫しているという感覚である「自己一貫的性同一性」5項目、自己の性別が他者の思う性別と一致しているという感覚である「他者一致性的性同一性」3項目、自己の性別での展望性が認識できているという感覚である「展望的

Table 1 ジェンダー・アイデンティティ尺度

現実展望的性同一性（女性： $\alpha=.86$ ）
展望的性同一性（女性： $\alpha=.83$ ） 自分が女性として望んでいることがはっきりしている。 自分が女性としてどうなりたいのかははっきりしている。 自分が女性としてすべきことが、はっきりしている。
社会現実的性同一性（女性： $\alpha=.80$ ） 現実の社会の中で、女性として自分らしい生き方ができると思う。 現実の社会の中で、女性として自分らしい生活が送れる自信がある。 現実の社会の中で、女性として自分の可能性を充分に実現できると思う。 女性として自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う。*
一致一貫的性同一性（女性： $\alpha=.87$ ）
自己一貫的性同一性（女性： $\alpha=.81$ ） 過去において、自分の性別に自信がもてなくなったことがある。* 過去において、自分の性別をなくしてしまったような気がする。* いつからか自分の性別がわからなくなってしまったような気がする。* 今のままでは次第に自分の性別がわからなくなっていくような気がする。* 自分の性別に迷いを感じることもある。*
他者一致性的性同一性（女性： $\alpha=.71$ ） 人に見られている自分の性別と本当の自分の性別は一致していないと感じる。* 女性としての自分は、人には理解されないだろう。* 人前での自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする。*

*：逆転項目

Table 2 成人キャリア成熟尺度

人生キャリア関心性尺度 ($\alpha=.87$)
<p>自分のこれからの人生や生き方には、大変関心をもっている。 人生設計や生き方に役立つ情報を、積極的に収集するようにしている。 自分は何のために生きているのか、あまり考えたことがない。* これからの人生を、より充実したものにしたいと強く思う。 人生や生き方に関係する本や雑誌などは、ほとんど読まない。* 人生設計は自分にとって重要な問題なので、真剣に考えている。 どのように生きるべきかということは、あまり気にならない。* 充実した人生を送るために参考となる話は、注意して聞いている。 どうすれば人生をよりよく生きられるのか、考えたことがある。</p>
人生キャリア自律性尺度 ($\alpha=.81$)
<p>自分の人生を主体的に送っている。 人生や生き方には、自分で責任をもつ。 生まれてこなければよかったと思うことが、しばしばある。* 自分から進んで、どんな人生を送っていくのか決めている。 人生が充実しないのは、大半は周囲の環境によると思う。* 人生で難しい問題に直面しても、自分なりに積極的に解決していく。 周りの雰囲気にあわせて、人生を送っていけばよい。* 充実した人生になるかどうかは、自分の意思と責任によると思う。 これからの人生を通して、さらに自分自身を伸ばし高めていきたい。</p>
人生キャリア計画性尺度 ($\alpha=.87$)
<p>これからの人生や生き方について、自分なりの見通しをもっている。 これからの人生で、取り組んでみたいことがいくつかある。 人生設計はあるけれど、それを実現するための努力は特にしていない。* 自分が望む生き方をするために、具体的な計画を立てている。 これからの人生で何を目標とすべきか、わからない。* 希望する人生や生き方が送れるように、努力している。 これからの人生のことは、ほとんど予想がつかない。* 今後どんな人生を送っていきたいのか、自分なりの目標をもっている。 自分が期待しているような人生を、この先実現できそうである。</p>

*：逆転項目

性同一性」3項目、自己の性別が社会とつながりを持てているという感覚である「社会現実的性同一性」4項目、合計4因子15項目から成る(Table 1)。全てにおいて0.70以上の α 係数が求められており、信頼性は確認されている。また、確認的因子分析(RMSEA=0.064)、併存的妥当性が確認されている。

② 成人キャリア成熟尺度

坂柳(1999)によって作成されたもので

ある。「関心性：自己のキャリアに対して、積極的な関心をもっているか」9項目、「自律性：自己のキャリアへの取り組み姿勢が、自律的であるか」9項目、「計画性：自己のキャリアに対して、将来展望をもち、計画的であるか」9項目、以上の3側面から測定され、27項目から成る(Table 2)。併存的妥当性、信頼性(α 係数が0.80以上)が確認されている。

③ 結婚願望

Table 3 刺激文

子ども無し群
<p>私は今、ある仕事を任されて、成果も上がっています。子どもはまだいませんが、結婚生活も3年目に入り、仕事と家事の両立に忙殺されながらも充実した日々を送っています。<u>上司からの評価も高く、「管理職も夢じゃないね」と言われています。</u></p> <p>ある日、会社での仕事を終え、帰宅した私は夕飯の支度にとりかかります。しばらくすると、夫が帰ってきました。夫と一緒に、今日の出来事を話しながら夕飯を食べます。夕飯を食べ終わり、片付けを始めると、ソファに座ってくつろぎながらテレビのバラエティ番組を見て笑っている夫の姿が目に映りました。私は何ともいえない気分になりながら、いつものように1人で片付けを続けました。</p> <p>次の日、私はいつも通り朝から仕事に向かっていました。満員電車で揺られ、窓の外を流れていく景色を見つめています。</p> <p>(ここから続きを書いてください。)</p>
子ども有り群
<p>私は現在育児休暇中です。育児休暇を取る前までは、仕事と家事の両立に忙殺されながらも、充実した日々を送っていました。上司からの評価も高く、「管理職も夢じゃないね」と言われていました。現在は、子育てと家事に専念する毎日です。</p> <p>ある日の夜、いつものように遅く帰ってくる夫のために夕飯を作っていました。その後、ようやく子どもを寝かしつけましたが、夫はまだ帰ってきません。時刻は10時過ぎです。リビングで1人、ため息をついてソファに腰を下ろしました。</p> <p>次の日、育児休暇から復職したまり子さんにラインで「最近どう？」とメッセージを送ってみました。しばらくすると「すごく大変…。毎日が忙しくて疲れてる…」と返信がありました。</p> <p>(ここから続きを書いてください。)</p>

フェースシートにおいて、将来家庭をも
ちたいかどうかを2件法で尋ねた。

④ 刺激文を受けて物語作成の記述

「以下の文章を読み、あなたが主人公に
なりきり、物語を完成させてください。で
きるだけ長い物語で、詳しくお書きくだ
さい。(主人公がどのように考え、どのよ
うに感じ、その結果どうするのか、詳し
くお書きください。)」という教示の元、
物語を作成してもらった。2種類の刺激
文をTable 3に記す。

この物語結末の分析結果は篠崎・宮崎
(2015)に基づいて、【問題】で概要し
た通りである。

【結果】

1. 物語結末、家庭願望によるジェン ダー・アイデンティティ、キャリア成熟 の差の検討

物語結末と家庭希望を独立変数、ジェン
ダー・アイデンティティ尺度低次因子「展
望的性同一性」に従属変数として分析を行
った(Table 4)。交互作用は有意差が見
られなかった。将来家庭をもちたくな
いと回答した人に比べて、将来家庭を
もちたいと回答した人のほうが1%水準
で「展望的性同一性」の得点が高いとい
う結果になった($F(1, 56) = 7.76, p < .01$)。

物語結末と家庭願望を独立変数、ジェン

Table 4 物語結末と家庭希望が展望的性同一性に与える影響の分散分析結果

	仕事と家事を両立		仕事を辞めて家庭を選択		葛藤	
	M	SD	M	SD	M	SD
はい	4.68	1.01	4.17	.71	4.57	1.17
いいえ	3.89	1.84			2.83	1.14
物語結末 $F(2, 56) = 1.00$ 家庭希望 $F(1, 56) = 7.76^{**}$ 交互作用 $F(1, 56) = 1.09$						

注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 5 物語結末と家庭希望が自己一貫的性同一性に与える影響の分散分析結果

	仕事と家事を両立		仕事を辞めて家庭を選択		葛藤	
	M	SD	M	SD	M	SD
はい	5.61	1.44	4.40	.85	5.83	1.22
いいえ	5.00	1.31			4.05	2.21
物語結末 $F(2, 56) = 1.06$ 家庭希望 $F(1, 56) = 4.32^*$ 交互作用 $F(1, 56) = 1.05$						

注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

ダー・アイデンティティ尺度低次因子「自己一貫性同一性」を従属変数として分析を行った (Table 5)。交互作用は有意差が見られなかった。将来家庭をもちたくなないと回答した人に比べて、将来家庭をもちたいと回答した人の方が5%水準で「自己一貫性同一性」の得点が高いという結果になった ($F(1, 56) = 4.32$, $p < .05$)。

「社会現実的性同一性」「他者一致的性同一性」では、交互作用、主効果共に有意差は検出されなかった。

また、成人キャリア成熟尺度「人生キャリア関心性」「人生キャリア自律性」「人生キャリア計画性」全てにおいても、交互作用、主効果共に有意差は検出されなかった。

2. ジェンダー・アイデンティティと成人キャリア成熟が家庭願望に及ぼす影響の検討

ジェンダー・アイデンティティ尺度、成人キャリア成熟尺度の各下位尺度得点を独

立変数、家庭希望を従属変数として判別分析を行った。その結果、展望的性同一性と自己一致的性同一性、人生キャリア自律性の得点が高い傾向にある学生ほど家庭をもちたいと思っている傾向にあり、他者一致的性同一性と人生キャリア計画性の得点が高い傾向にある学生ほど家庭をもちたくないている傾向が見られた (Table 6, Figure 4)。

【考察】

1. 物語結末、家庭願望によるジェンダー・アイデンティティ、キャリア成熟の差の検討に関して

将来家庭をもちたいと思っている女子学生は、もちたくない女子学生に比べて「展望的性同一性」、「自己一貫的性同一性」の得点が高くなった。このことは非常に納得できる結果である。「展望的性同一性」とは、自己の性別での展望性が認識できているという感覚である。「自己一貫的性同一性」とは、自己の性別が一貫しているとい

Table 6 判別分析結果

固有値				
関数	固有値	分散の%	累積%	正準相関
1	.305a	100.0	100.0	.484

Wilksのラムダ				
関数の検定	Wilksのラムダ	カイ 2 乗	df	有意確率
1	.766	15.321	7	.032

標準化された正準判別関数係数	
	関数 1
展望的性同一性	.577
社会現実的性同一性	.046
自己一貫的性同一性	1.220
他者一致的性同一性	-1.156
人生キャリア関心性	-.029
人生キャリア自律性	.366
人生キャリア計画性	-.289

グループ重心の関数	
	関数 1
家庭をもちたいか	
はい	.192
いいえ	-1.538

分類結果 ^{a,c}					
家庭をもちたいか			予測グループ番号		合計
			はい	いいえ	
元のデータ	度数	はい	46	10	56
		いいえ	2	5	7
	%	はい	82.1	17.9	100.0
		いいえ	28.6	71.4	100.0
交差確認済み ^b	度数	はい	44	12	56
		いいえ	3	4	7
	%	はい	78.6	21.4	100.0
		いいえ	42.9	57.1	100.0

交差妥当化の結果、判別の中率は76.2%であった。

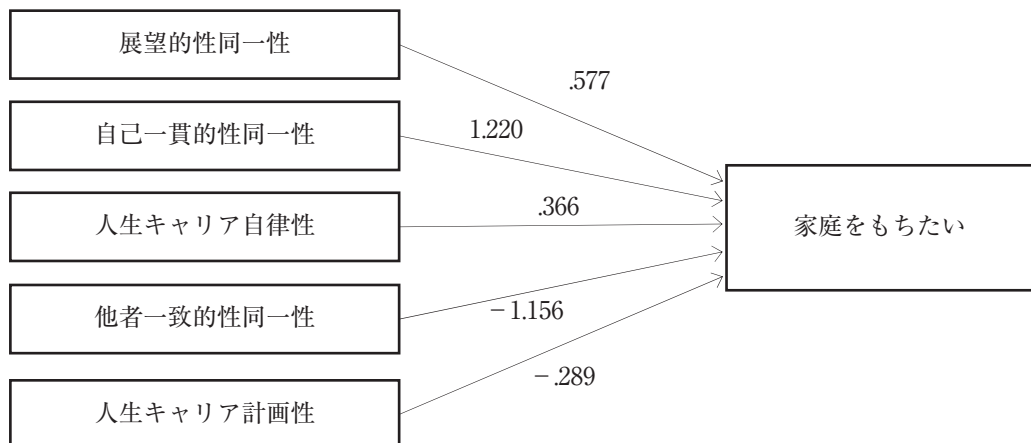


Figure 4 判別分析の結果

う感覚である。性（性別）と深くかかわる「結婚願望」は、その性意識に差を生じさせるだろう。

両従属変数ともに、物語結末の主効果には有意差がなかった。有意差が検出されなかったことを拡大解釈することは厳に慎まなければならない。しかし、「結婚」「家事」「育児」という文脈の中で、仕事を続けるのか辞めるのかの選択において、ジェンダー・アイデンティティはあまり影響がないのかもしれない。もし、それが事実だとしたら、M字カーブはジェンダー意識の結果ではなく、それ以外（例えば外的要因としてのサポートの少なさ等）の理由によるものが大となる。この検証は今後の課題である。

2. ジェンダー・アイデンティティと成人キャリア成熟が家庭願望に及ぼす影響の検討に関して

判別分析を行った結果、「人生キャリア自律性」が高い女子学生ほど家庭をもちたいと思っている傾向にあった。これは、主体的に生きたいと思っている女子学生ほど、家庭をもちたいと思っていることを意味する。逆に、主体的に生きたくないと思っている女子学生ほど、家庭をもちたくないということになる。「女「、」三界に家無し」ということわざにもあるように、昔の日本には女性は結婚をしたら夫に従うものだという認識が強かった（つまり主体性はなかった。）。しかし、現代の女子学生にはそのような認識はほとんどないと言えるだろう。夫に従うのではなく、家庭をもってからもなお主体的に生きたいと思っている女子学生が増えていると考えられる。

3. 総括

上述の考察から、M字カーブの原因は女性の心理的要因というより、外的要因の影響が大きいのと考えられないだろうか。つまり、夫や社会のサポートの乏しさなどである。M字カーブは、女性側の心理要因ではなく、むしろ男性側の要因（ひょっとすれば心理的要因）、社会の要因の結果なのかもしれない。言いかえれば、その要因が変わればM字カーブは消失するということになる。男性側の心理の調査が必須だろう。これは今後の課題である。

【謝辞】

本研究におきまして、調査にご協力下さいました多くの方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

【引用文献】

- 新井千世・宮崎圭子（2012）. 女性は本当に成功回避しているか？日本心理臨床学会第31回秋季大会発表論文集，268.
- 岩田正美・大沢真知子（2015）. なぜ女性は仕事を辞めるのか 5155人軌跡から読み解く. 青弓社
- 総務省（2014）. 情報通信白書平成26年版. <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/html/nc141210.html>
- 高橋伸子（2008）. 新・女性の選択 就職 結婚 子育て 転職 昇進. マガジンハウス
- 東京CNN（2013）. 「ウーマノミクス」は日本を救うか 安倍政権が女性活躍を後押し <http://www.cnn.co.jp/business/35032452.html>

Kathy Matsui (2014). ウーマノミクス
4.0: 今こそ実行の時 [http://www.
goldmansachs.com/japan/our-
thinking/pages/womenomics4.0.html](http://www.goldmansachs.com/japan/our-thinking/pages/womenomics4.0.html)
内閣府 (2013). 男女共同参画白書平成25
年 度 版. [http://www.gender.go.jp/
about_danjo/whitepaper/h25/zentai/
index.html](http://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/h25/zentai/index.html)
Horner, M.S. (1972). Toward an under-

standing of achievement-related con-
flicts in women. *Journal of Social Is-
sues*, 28, No.2.

篠崎恵・宮崎圭子 (2015). 現代の女子学
生における潜在的キャリア意識の研究
—ジェンダー・アイデンティティ、キ
ャリア成熟および結婚希望との関連—
跡見学園女子大学文学部臨床心理学科
紀要 3, 51-62.